



TITLE:

大学改革にさいし図書館にのぞむ -
“利用者の声”特集号(その2) -

AUTHOR(S):

北村, 貞太郎

CITATION:

北村, 貞太郎. 大学改革にさいし図書館にのぞむ - “利用者の声”特集号
(その2) -. 静脩 1970, 7(4): 1-2

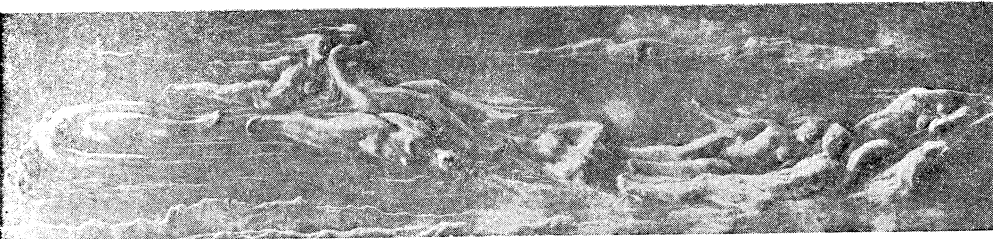
ISSUE DATE:

1970-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36610>

RIGHT:



大学改革にさいし図書館にのぞむ

——“利用者の声”特集号（その二）——

はじめに

本号には前号にもれた部局のかたがたのご意見を集めました。1部局1名の割合でご寄稿を依頼したので、もとよりこれで利用者のご意向を全面的に反映しえたとは思っていません。しかしこの2号にお示しいただいたものにかぎっても、未来の進路にたいしての示唆にとみ、図書館側がふかく傾聴し留意せねばならぬものが多くあると存じます。

次号には、これにこたえる“図書館側の声”が多く寄せられることを期待します。

一 利用者の夢

——情報化時代の図書館とは——

農学部 助教授 北村 貞太郎

京都大学図書館は蔵書数290万冊を数える世界有数の大図書館であると聞く。しかし、図書の利用効率からみた有効蔵書数は一体どの位あるのだろうか。

整理の悪い、埃だらけの図書館へコツコツと通い、コツコツと集めた情報だけを頼りにして学問人となれる時代はすでに終わった。今日はこうした古典的労働が電子計算機の助けを借りると少なくとも半分以上に軽減できる時代なのである。情報化時代における民間企業での電子計算機の活用はめざましい。かつての情報センターはこうした世の中の推移を、ただ傍観していてよいのであろうか。京都大学図書館もおそまきながらそのシステムを徹底的に改善すべき時世ではなからうか。

京都大学図書館が名実ともに世界一流の図書館として、日本文化の都に君臨するために次の二つの夢を是非実現したいものである。

1. 日本および世界の文化のデータバンクであること。
2. 図書利用効率の最も高い図書館であること。

第一に京都は日本文化の都といわれるが、日本および世界の文化遺産を徹底的に集積しておくところが日本のどこにあるのであろうか。かつての京都大学図書館は時代に即応してその役目を果たしてきたであろうが、今日のそれはいかかなものであろう。大学において知恵が枯渇するのも無理からぬことではないか。これからの新しい時代には京都を日本文化の中心、いな、世界文化の中核として据え置くためにも、京都人が一致協力して世界一の図書館

館を京都に設置してもよいと思われる。京都国立博物館、国立近代美術館、京都会館、国立京都国際会館などに加えて、学問の殿堂、国立京都図書館がこの都にあるべきではなかろうか。京都大学図書館はその前身でありたいものだ。

利用効率の高い図書館とはこんな風にありたい。

1. 文献相談室へ入る。そこには専門別文献相談係がいる。その人達に必要な文献を口頭で尋ねる。相談係はそれに応じて手元のタイプをたたく。タイプはただちに目的の文献の分類番号をカードとして打ち出す（このときに同文献の在庫の有無も合せて確かめる）。

2. 打ち出されたカードを図書貸出室へ持参し、図書借出カード（クレジットカードのようなもの）を添えて同カードを貸出係に提出する。目的の図書はその後ただちに入手する。

3. 文献複写室へ行く。再び図書借出カードとともに必要文献のコピーを依頼する。数分でコピーを入手し、図書館を出る。

このような図書利用システムはできないものだろうか。図書カードの検索、図書借出カードの記入などは利用者にとっていかに面倒なことか。即座に文献コピーが得られないことはいかに不便なことか。総合科学（農村計画論）を専攻する筆者などが求める文献は非常に広範囲にわたり、各学部図書館に散在している。しかも現在の文献コピーは時間がかかりすぎる。全くお手あげである。

そういえば、2週間ほど前に依頼した文献コピーがいまだに手元に入っていない。もっとも「学問とはのんびりやるもの、それでよいのだ」という教訓かも知れない。

人文科学研究所 助教授 松 尾 尊 兎

京大創立70周年事業とかで体育館が建つらしい。いったい大学とは何をするとところかといいたくなる。学生の肉体的健康のめんどろまでみる前に、もっとさきになすべきことは、いくらでもあるはずだ。ちょうど20年前、この大学に入学したとき、付属図書館は、いずれ増築される予定ときかされた。現状よりも何階か上に重ねるように設計されているというのだ。ところが一向に実現しないのである。

閲覧室は大入満員、いつの間にか教官閲覧室は消滅してしまった。書庫にいたっては論外である。私のように日本の近代史を勉強しているものには、新聞は不可欠の資料だ。京大には、かなりのコレクションがある。ところがこれは、教育学部の裏手にある土蔵の中に保管されている。請求すると係の人は雨が降ろうが雪が降ろうが、重い新聞綴を本館の二階まで運び上げねばならぬのだ。おのずと新聞も傷む。係の人に気の毒で、近頃はなるべく京都府立資料館で見るようにしているが、ここでは種類に限定がある。とにかく早く増築を行なって、新聞などは書庫内で読める設備にしてもらいたい。

どこの部局でも書庫がせまくて困っている。利用度の少ない雑誌などは、皆、先述のお蔵入りである。こういうものも付属図書館に一括収容したらどうだろう。近頃各学部で学生のための研究室をよこせという要求が出ているようだ。こういう声が出るのも一つには付属、各学部とも学生の図書閲覧室がせまいのと、設備がよくないからであろう。

「大砲か、バスターか」という古い設問がある。「体育館か図書館か」。常識ある大学人の答えは明らかだろう。「体育館も図書館も」という線で行こうとしているのだ、と大学の幹部諸公はいわれるかも知れぬ。それならば、ことばでなく実行で示してもらいたい。部局の図書館統合の話があるようだが、設備の点はくれぐれも気をつけてやってもらいたい。そして付属図書館の増築も別個に実行してほしい。

「大学改革にさいし図書館にのぞむ」というテーマだが、「大学当局にのぞむ」になってしまった。図書館の人々にたいし、私は何ものぞまない。劣悪な勤務条件でしかも陽の当ら